

九郎太郎殿御返事

建治二年九月一五日 五五歳

いゑの芋一駄送り給ひ候。崑崙山と申す山には玉のみ有りて石なし。石ともしければ玉をもて石をかふ。ほうれいひんと申す浦には木草なし。いをもつて薪をかふ。鼻に病ある者はせんだん香、用にあらず。眼なき者は明らかなる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処は甲斐国波木井の郷の内の深山なり。西には七面のがれと申す岳あり。東は天子のたけ、南は鷹取のたけ、北は身延のたけ、四山の中に深き谷あり、はこのそこのごとし。峰にははかうの猿の音かまびすし。谷にはたいかいの石多し。

然れども、するがのいものやうに候石は一つも候はず。いものめづらしき事、くらき夜のともしびにもすぎ、かはける時の水にもすぎて候ひき。いかにめづらしからずとはあそばされて候ぞ。されば其れには多く候か。あらこひし、あらこひし。法華経・釈迦仏にゆづりまゐらせ候ひぬ。定んで仏は御志をおさめ給ふなれば御悦び候らん。霊山浄土へまゐらせ給ひたらん時御尋ねあるべし。恐々謹言。

建治 九月十五日

日 蓮 花 押

九郎太郎殿御返事